談叢

朴刀

（水滸傳の地理、四）

如舟老人

水滸傳に見えた器械で日本の飜譯者に江州車以上に分らなんだものは朴刀といふ武器で、第一回の末に少華山の朱武陳達楊春の三頭領が史進から中秋の月見の宴に招待されて行く時の

將了朴刀、各跨口腰刀、不騎鞍馬、步行下山、逕來史家莊上、

といふ文に最初に出て來る。この腰刀の短刀たることは古くから日本にも慣用されて明かであるが、朴刀が何であるかは一寸と當てにくい。第二回史大郎夜走華陰縣、魯提轄拳打鎮關西の條に史進が縣尉に不意の襲撃を受けて朱武等三人と共に家に火をかけて逃げる時にも

鎗架上各人跨了腰刀、拿了朴刀（胡適氏撰に作る）

の文があり、第五回赤松林で史進と魯智深が再び出會ふ光景は日本の芝居にまで仕組まれて團菊の「だんまり」の一幕となつたもので、芝居では史進が刀を持てるが、此處でも花和尚の鐵の禪杖に對して朴刀を持つて闘ふのである。林冲その他の好漢何れも旅行する時に携帶するのはこの朴刀である。

曲亭馬琴はこの武器に就いて初卷職役稱呼俗解に解釋を附け「陶氏が云、短き手鎗やうのものにて、穗の長きものなり、朴刀の事さま〴〵の推量説のみなりしが、武松が高塀を越るとき突立てこれを力とする處にて、その形狀を合點せりと云ふ」とした。

種彦が友人と合著で水滸傳を飜譯せんと試みた時に之に與へた書翰に蘭山も馬琴も共に朴刀に頭を惱ましたが終に分らずにゐるから、盲千人目明き一人の世の中だから宜しくやつて置かうと相談したものを、大華山人（高橋四郎氏）の隨筆で讀んだことがある。

この朴の字は胡適氏の活版本には撲にも作つてゐるが自分の考では手偏は間違で多分朴の字は樸の略字であつて、樸と璞と共に荒ら削りのものを意味し康熙字典に

凡器未成者、皆謂之樸、〔爾雅釋器〕木謂之剧、玉謂之雕、〔郭註〕皆治樸之名

と解したのに從ひ、荒削りの刄形を附けた木刀とすべきである。現に刀なども打ち上げて研にかけぬものを刀樸といふのである。

然らばその實物はどんなものかといふに、それは多分現今北支那の徒歩旅客が必ず携帶する木劒狀のステッキであらう。木材の質が何かは知らぬが、楢の如き稍堅い木を三尺餘りの長さに切りその握りを丸く削り先に鈍い兩刄を附けて稍扁平にしてゐる。

明治三十六年二月末に天津を出發して今の津浦鐵道の出來る以前にこの線路に沿ひ德州を經て濟南府まで馬車旅行をした際に、恰も滿洲方面への出稼農夫が鄕里に還つて陰曆正月を迎へた後に再び出稼地に向ふものが、毎日絡繹として途上に絕えぬのに出會つた。彼等は我々の手提げ折鞄を長く大きくしたやうな布袋の兩方に衣物手廻り品等を入れて之を肩に掛け手に各このステッキを突いてゐたので、前に讀んだ馬琴種彥等の困つた朴刀なるものがこれに違ひなからうと覺つた。此の頃中野(竹四郎)文學士にこの事を語つた所が、同氏は村落内に入れば狗に苦しめられるから、このステッキは犬追ひに必要な武器であるといはれたのは如何にもよい解釋である。尙ほ同氏は滿鐵社員が旅行中高粱畑に隱れた馬賊に要擊されたことがあつて、兩方から一度にこのステッキで腦天を打ち割られて卽死したといはれた。

朴刀は此の如く北支那一般の日常使用品で金屬の穗や刄を附けた武器ではなく、出稼苦力等の必ず持てゐるもので、之を持つのが武裝した意味にならぬので朱武等の良民に化けて山を下る時に携帶したのであらう。馬琴種彥等を地下から喚び起してこの事を知らせたら何の事だ、人を馬鹿にしてると殘念がるであらう。